

不正の正当化——米国における朝鮮戦争の記憶と現代の北東アジア政策

マーク・カプリオ

〈訳〉真田 尚剛

- 一 正しい戦争論
- 二 忘れられた戦争の正当化
- 三 朝鮮戦争における米国…それは正しい介入であったのか？
- 四 *Jus in Bello* (いかに戦われるのか) の不正

人類は戦争を行う決断を正当化出来るだろうか。もしそうであれば、どのような条件によって、それは許されるのだろうか。逆に、もしそうでないならば、なぜ政府は、戦争が正当であることを絶えず主張しようとしているのか。そして、なぜ国民は戦場へ子供たちを送り出すという主張を支え続けているのか。国家による戦争への関与を許す条件が存在するかどうかは、世紀をまたいで議論されてきたテーマであり、「我々は戦争を行い、そして平和を得るだろう」と断言したアウグスティヌス (St. Augustine) がいた少なくとも五世紀からあった論点である。時代を超え、国王や大統領たちは、神聖な文脈や差し迫った脅威を引き合いに出し、人々を戦争に参加させようとしてきた。銃声が鳴り止むと、敵を敗北させた手段や戦争を選択した決定を正当化しようと、彼らは戦争の物語を組

み立てる。ウォルツァー (Michael Walzer) が「たとえ地獄においてさえ、多かれ少なかれ人道的であることは可能であり、制限された戦いも然りである。我々は、なぜそれが可能であるのかについて理解しよう努めなければならぬ⁽¹⁾」と述べている通り、戦争は地獄である。他方、正しい戦争という概念は、想像の産物でしかないと疑問視する者もいる。フィアラ (Andrew Fiala) は、正しい戦争という概念を真実の愛 (true love) に例える。人々は、それらの観念や定義を考え出すことが出来るが、そのことは必ずしもそれが現実であるということを証明しているわけではない。事実、フィアラは正しい戦争という概念と真実の愛の双方を幻想だと述べている⁽²⁾。

依然として国家は、戦争を行うという決定の正当性を主張し、守ろうと、極端な方法を取り、途方もないコストを払っている。もつともな方法により、国家は正しい戦争における戦闘の記憶を刻み込んだ国家の物語を創り出すと励んでいる。伝統的に学校の教科書には、国家の歴史における美しい記述や国家が博物館や祝日の式典で演出するようなメッセージが、生徒に見せるために掲載されている。そうすることにより、記念碑や郵便切手、通貨に描かれている英雄になった軍人の記憶を保たせている。この物語を疑ったり、変えたりする努力は、ラディカル修正主義から守るための何層もの防波堤を通り抜けるというほぼ不可能な作業に直面する⁽³⁾。

以下では、朝鮮半島外からの戦争参加の「正当性」を脅かす確立された物語に挑む「修正主義者ら」(revisionists)の立場から、朝鮮戦争の起源に関する議論を通じ、この点を考察する。朝鮮戦争における創造された記憶は、好戦的な政府が戦争参加を正当化するためのテクニックに関する事例を与えてくれる。また、正しい戦争という考えを思索する際の具体的な事例として、我々はこのテーマを考えることが出来る。朝鮮戦争の起源に関する伝統的な見解に挑むことは、これらの物語に疑問を呈すことである。本稿は、この歴史を詳細に問い直し、戦争の単なる歴史的な記憶という以上に、北東アジアにおける近年の政治、特に朝鮮半島における二つの国家に対する現代のイメージを深く考察することを試みるものである。

一 正しい戦争論

ウォルツァーは、全ての戦争における「道徳の本質」は「二つに分けられる」と述べている。戦争がどのように始まるのか (*jus ad bellum*)、そしていかに戦われるのか (*jus in bello*)⁽⁴⁾である。そのため、正しい戦争という考えは、人の殺害や財産の破壊という社会が一般的に非合法や卑劣であると評価する行為に対して、道徳上の基準を構築する試みである。正しい戦争を唱える者は、戦争が卑劣であるという点に同意するが、より卑劣で間違ったことを正す意図を持って行動するならば、戦争は許されると付け加える。時には、戦争が必要である。ティムズ (Peter S. Temes) は、戦争が良いもの (good) にはならないとしても、正しいもの (just) にはなりうるとする。

国家の道徳性は、いつ、どのように戦争を行うかによって示される。人間の道徳性は、いつ、どのように戦うのかによって示される。しかし、戦争を語る場合、善か悪かという道徳基準の柱では不十分であるか、十分過ぎる。それらは、明快な言葉であるが、実際に戦争で起こっていることを明らかにするというよりも、曖昧にする。これらの言葉は、明確過ぎる。これらは、希望や良い結果を目的とする残酷な行動という、まさに戦争の本質における道徳的歩み寄りをほとんど許さない。そして、少なくとも過去二〇〇〇年間において、戦争の道徳性を語る西洋の語彙は、「良い」戦争ではなく、気が進まない戦闘の義務を連想させる、または他方にしか神が存在しないという戦術的な利点を暗示するような概念である。「正しい」戦争という考えを中心に展開してきた。⁽⁵⁾

開戦や参戦に関する道徳性を規格化するための様々な試みは、世紀を経て行われてきたが、その中には一貫して次の六つの教義があらわれる。

- 1 合法的な権威の下、行わなければならない。
- 2 正しい理由と意図のために、行われなければならない。
- 3 全ての平和的な手段を使い果たした後の最終手段として行わなければならない。
- 4 成功する妥当なチャンスがあり、戦争を行った結果として平和になる可能性が最も高くならない。
い。
- 5 戦争そのものによる損害よりも、そこから得られる利益が大きくならなければならないという均衡の原則を
忠実に守らなければならない。
- 6 戦闘員と民間人を区別しなければならない。⁽⁶⁾

最初の三つの原則はどのように戦争を始めるか、あとの三点はいかに戦争を戦うのかについて示している。これらの原則は、以下の三つの疑問を残している。第一に、例えば、我々は誰の視点から合法的な機関や正しい理由であると理解すべきなのかという客観性に関する点。第二に、我々は、いかにして平和的な手段が全て使い尽くされた状況だと結論を下すのかという判断に関する点。第三に、どのように指導者が、軍隊によって被る損害よりも、戦争によって得られる利益の方が大きいと予測出来るのかという洞察力に関する点である。

一九世紀後半と二〇世紀における総力戦が例示しているように、最近の戦争における発展は、どの程度これらの基準が適用出来るのかを難しくしている。近代の戦場において境界を定義することは困難になってきており、戦闘員と民間人の差異は区別できない程に希薄化している。⁽⁷⁾ そのため、伝統的な正しい戦争という考えは、(過去においても)不当だったかも知れないが)もはや現代の戦争には適応出来ないだろう。それゆえ、我々は正しい戦争の条件を決めるため、より現代的な試みを研究することが求められる。朝鮮戦争勃発以前ではあるが、第二次世界大戦後

に起草された国連憲章は、そのような試みの一つの結果である。同憲章で定められている条件は、伝統的な正しい戦争の原則によって許されている条件よりも、はるかに厳しいものである。（上述の六つの教義における）三番目の原則のように、この国際機関は争っている国家に対して、「当事国が選択する平和的手段」を用いることにより、関係悪化を解決するよう促す一方、戦争を開始する前に、国連安全保障理事会からの助力を求めするため、これらの条件が必要だとしている。それは、攻撃してきた敵に対して報復する場合、一国家や集団による自衛の範囲においてそれは許されるが、「安全保障理事会が、国際の平和及び安全の維持に必要な措置を取るまでの間」（国連憲章第五一条）と定めている。そのため、国連安全保障理事会は、「平和に対する脅威、平和の破壊又は侵略行為」の存在を決定した後で、「国際の平和及び安定の維持又は回復に必要な空軍、海軍又は陸軍の行動を取ることができ」（国連憲章第三九条及び第四二条⁸⁾。一九二八年に六五カ国によって署名され、戦争の非合法化を試みたケロッグ・ブリアン条約とは異なり、国連憲章は戦争の必要性を認めているが、他方で、少なくとも国連安全保障理事会の承認を得ていない加盟国による戦争への単独関与を抑制しようとしている。後述するように、国連憲章第五一条は、一九五〇年七月から北朝鮮軍と交戦するために、米国が国連軍を組織したことについての正当化を連想させる。

極端な悲観的現実主義もしくは理想的平和主義を支持する人でさえ、各々異なる理由から、正しい戦争をナイーブだと批判するが、正しい戦争における原則は、その両者の思想を持ち合わせている。前者の場合、戦争は不可避免であるという共有された信条に道徳的要素を付け加える。後者の場合、戦争が許されるといふ状況は制限されるべきだとする共有された信条を持っており（いかなる状況下でも反戦の立場である純粋な非暴力主義者を除いて、多くの平和主義者は自衛を戦争へ関与するための合法的な理由だと認めている⁹⁾）、戦争という選択肢については、戦争の防止という平和的手段が全て使い尽くされた後でなければ、用いることが出来ない最終手段だと考えている。

二 忘れられた戦争の正当化

国家は、特に戦争に関する物語においてであるが、国家の物語に相応しくない部分を隠した、国家の物語を伝える慣習を創り出す野心を持っている。これらの慣習は、若者を戦場へ送るといふ国家の決断、そして彼らの命を犠牲にするリスクを正当化する目的を持っている。そして、これには二重の目的がある。すなわち、これらの慣習は、国家の記憶を創り上げることに加え、もし戦争において再び敵と向かい合った場合、次の軍隊への招集を容易にするというものである。国家がどの程度柔軟に物語を創り上げられるかは、戦争の勝敗によって大きく左右される上、戦争で戦った相手の世界的地位によっても影響される。メキシコ人やフィリピン人、ベトナム人は米国の侵略に対して敵対的な感情を抱くであろうが、彼らの世界的地位と経済的依存により、彼らの国家の物語において米国のよるかつての軍事的行為をおおびらに非難することは出来ない。少なくとも、韓国人や中国人が日本の戦時中に関する物語を批判する程度である。韓国において、高度経済成長が始まった一九八〇年代から、国民の感情が吹き出したことを考えると、経済面における独立は、かつての敵の国家の物語に対する影響力において、大きな要素だと考えられる。

米国における朝鮮戦争は、第二次世界大戦（米国の「良い戦争」）における英雄主義とベトナム戦争（米国の「忘れられた戦争」）の悲惨な失敗に挟まれた軍事行動であり、「忘れられた戦争」と一般的に呼ばれている。メディアや大衆文化の販売元は、この「警察行動」への参加を正当化するために最善を尽くしたが、戦争に対するわずかな関心の証は一九五〇年代に表面化した。*Time* や *Newsweek* などの週刊雑誌や *National Review* は、朝鮮半島における戦いへの参加を決めたトルーマン (Harry Truman) 大統領の支援のもとで団結した。これらの雑誌は、アジアで戦争を始めることによりソ連が米国と軍事的に対決するというリスクについて、犯したかどうか (whether) では

なく、なぜ (why) 犯したのかについて、推測した。Time の一九五〇年七月一七日号は、ソビエトの影響力を (モスクワに位置するスターリン (Joseph Stalin) のヤヌス (Janus) の顔から) 東西へ伸びる矢で描写した地図を載せることにより、この点について答えた。そして、ちょうど五年前の第二次世界大戦における日独のように、北朝鮮による突如とした侵攻は準備されていた上、世界征服という狂的で野心的な企てと同類だとしている。この解釈は、スターリンの関心がヨーロッパからアジア、特に台湾と朝鮮へと変わり、成功するチャンスが大きいと思われる地域での活動をけしめかけたことを示している。「このような状況において、朝鮮はより安全な行動のように思える。(中略) そのため、スターリンは直前になり、厦門に出かけ、北朝鮮の共産主義者へゴーサインを出した。」⁽¹⁰⁾

同じ雑誌は、一般の米国人がこの米国による軍事行動について支持していたことを描いている。イリノイ州の農民であるマリン (Evan Main) は、米国が「もう少し早く前に浮かべば良かった考えだが、ロシア人たちに対してある種の行動を取るべきだった」と信じていた。この記事は、米国における以下のような一般的な意見をまとめている。それは、「アジアの半島という小さな部分に関する細かなクイズに答えられる数少ない米国民 (米国大統領) は、部隊や航空機、艦船を約束していた。しかし、そのようなことは、重要ではないように思える。国全体には、トルーマンが懸命に迅速な行動を取るといふ固い一般的な合意が存在した」というものである。⁽¹¹⁾ この雑誌は、米国の「迅速な行動」により、北朝鮮やソ連、共産主義の中国が遭遇した地域的「連鎖」と「分裂のポイント」が描かれている地図を取り込むことが出来るという潜在的な「善」について説明している。北朝鮮による攻撃は、米国へ東アジアにおける一連の課題を与えた。それは、「米国にとって強固な頼みの綱である」日本、「機会を潰された?」台湾、「フクバラハップが終わりを遂げた?」フィリピン、「危機が到来する?」東南アジアにおいてである。⁽¹²⁾ 朝鮮戦争が世界的な共産主義革命の一部であったという見解に対する少数派による公の挑戦は、左派ジャーナリストであるストーン (I.F. Stone) の一九五二年に出版された著書 *The Hidden History of the Korean War* の中

に見られる。⁽¹³⁾

第二次世界大戦の戦中戦後がそうであったように、ハリウッドもまた、朝鮮戦争の意味を説明するため、そして米国民の愛国心を奮い立たせるため、映画を作成することにより、義務に応えた。しかし、朝鮮戦争をテーマにした三五本の映画の内、わずか数本の映画しか大きな成功を収めなかった。多くの映画は赤字で終わったわけである。⁽¹⁴⁾ハリウッドは、ヒットした第二次世界大戦の映画のスタイルと俳優を使うことにより、成功を繰り返そうとしたとメイ (Lary May) は述べている。ドキュメンタリー「Why Korea」は、キャプラ (Frank Capra) による第二次世界大戦についてのシリーズ「Why We Fight」において用いられた映画技法を再び利用した作品である。多くの映画のテーマは、共産主義の脅威をナチズムやファシズムの脅威に置き換え、米国の国際的関与という第二次世界大戦時の米国のメッセージを思い起こさせた。⁽¹⁵⁾当時の米国は、ちょうど中国を「失い」、ソ連は原爆を爆発させ、共産主義者を捜し出そうとする魔女狩りのマッカーシズムが米国政府やハリウッドにおいてさえ入り込んでいたように、共産主義イデオロギーに対して否定的な興奮状態だったにもかかわらず、これらの映画が大きな成功を収めなかったことは驚きである。⁽¹⁶⁾これらのみすばらしい結果は、「朝鮮戦争は悲劇ではなく、勝利だ」という公式の『真実』を買うことを拒んだ米国の人々の態度を表しているものであり、ベトナム戦争における反戦運動で爆発させた冷淡さの現れであったとメイは評価している。⁽¹⁷⁾ハルバースタム (David Halberstam) は、著書 *Fifties* において、朝鮮戦争の持つ曖昧さを強調しており、それは戦争に適した古くもなく新しくもない主要メディアの技術的過渡期に位置しており、より広く知られた二つの戦争の狭間で戦われたという点である。

六〇年代のベトナム戦争とは異なり、朝鮮戦争の現場は米国の家庭に生放送で伝えられることはなかった。カラー画面に映し出されることもなかった。テレビ網はまだ行き渡っておらず、しかも朝鮮半島は地理的に遠過ぎて、都市の名も馴

染みがなかった。先の大戦は、ラジオ放送網の拡大に役立ったが、この戦争は違った。朝鮮戦争で最も優れた報道をしたのは日刊紙のジャーナリストであり、彼らは様々なドラマや英雄的で愛国的な行為を伝えたが、米本国ではさしたる関心も呼ばなかった。惨憺たるニュースが国民の興味を引くかどうか自体が疑わしかった。米国は朝鮮戦争について、戦争の最中こそ何とか耐え抜いていたが、戦争が終わってからは一刻も早く忘れたいと願った。第二次世界大戦やベトナム戦争は、おびただしい小説や演劇、映画などを生み出した。これとは対照的に、朝鮮戦争については見るべき作品が現れていない。最近出版された朝鮮戦争に関する歴史書には、リッジウェイ（Matthew Ridgway）将軍の言葉から採った『忘れられた戦争』という、まさにびつたりの題がつけられた⁽¹⁸⁾。

実際は、終焉する前に「忘れられた」ということである⁽¹⁹⁾。

朝鮮戦争が忘れられた戦争と評されるように、米国の人々は大きな議論を呼んだベトナム戦争を朝鮮戦争よりも先に称えることを選び、ワシントンDCのナショナルモールに記念碑を建てた。それは、朝鮮戦争で戦った軍人に捧げるよりも一三年も前の一九八二年のことである。教科書には同様のフィクションを載せ、米国の取り組みによって「わずかな勝利」を手に入れたと主張している。「二つの国家がもたらした」というような行為者がいない出来事として朝鮮の分断に触れ、北朝鮮の軍隊による韓国の侵略を戦争の起源だと主張し、教科書は共産主義陣営だけを非難する。結局、ソビエトは北朝鮮の人々を重武装させる一方、米国は五〇〇人の顧問団を残して淡々と撤退した⁽²⁰⁾。

国家の物語は、米国による戦闘への参加を「正しい」行為として理解するような歴史的記憶を形成する意図を持ち、（他の戦争と同様に）朝鮮戦争に関する記念碑や歴史の教科書を依然として描き出している。この物語は、学界において議論されている朝鮮戦争の起源についての論争から乖離している。朝鮮戦争は、「忘れられた」という評

備があるにもかかわらず、南北戦争を除く米国による他の全ての戦争以上に、戦争の起源に関する大きな議論を呼んでいる。⁽²¹⁾ 驚くべきことではないが、国家の物語はこの議論を反映していない。朝鮮戦争は、一九五〇年六月二十五日の早朝に始まり、一九五三年七月二七日に休戦協定が署名され、終わったということになっている。北朝鮮軍による攻撃の知らせは予期しないことであり、(Newsweekが表現した通り)「澄んだ空に雷が鳴った」⁽²²⁾ ようであった。

ようやくソ連が従属国家に対して攻撃するよう指示したことについての修正が受け入れられるようになった一つの転換点は、一九九四年にロシアのエリツィン (Boris Yeltsin) 大統領が、スターリンは金日成の南を攻撃する許可が欲しいという懇願を受け入れることに後ろ向きであったとするモスクワと平壤の間で交わされた電報を公開したことであった。著名な学者であるギャディス (John Lewis Gaddis) のような歴史家は、いまだにソ連の役割を否定することを拒んでいる。朝鮮半島に対するスターリンの関心についてのギャディスによる推測は、ソ連が日本占領から除外されたことに対するソ連のリーダーとしての憤慨、そして北朝鮮が攻撃しても米国は韓国を助けに来ないだろうという御都合主義を提示している。ギャディスは Newsweek において、西ヨーロッパにおけるますます厳しい状況が、スターリンに世界的な共産革命を成功させるため、アジアへ目を向けさせたと繰り返した。⁽²³⁾

この「正しさ」という国家の物語の遺物は、冷戦やソ連崩壊を経てもなお生き残っている。米国と日本が築いてきた安全保障に関する条約や協定が暗に示しているように、「極東における国際の平和及び安全の維持」は、この地域における米軍の駐留と同様に、米国の北朝鮮に対する対決姿勢の維持を正当化している。長年にわたり、米国が考える地域的脅威は、北朝鮮が朝鮮半島を統一するため二度目の奇襲攻撃を行う可能性である。近年、軍事的経済的に成長し、よみがえる中国は、第二の、場合によっては長期的な地域における懸念である。米国は、関係正常化のステップである朝鮮半島における二つの敵同士が朝鮮戦争終結を交渉するという北朝鮮の要求について真剣に考えることを、いつまでも避け続けるという姿勢を変えなければならない。共産主義国家は、まず核開発計画を

（無条件に）放棄しなければならない。近年見られるこのような疑問の余地がある用心深い米国の頑なな反応は、休戦協定が交わされた一九五三年七月以降、地域が維持してきた不安定な平和を脅かすものである。一九四九年から一九五〇年の間に見られた心配の種はいまだに残っており、近年の非武装地帯（DMZ）における比較的小規模の衝突が、第二次朝鮮戦争を勃発させるかも知れない。

三 朝鮮戦争における米国…それは正しい介入であったのか？

朝鮮戦争への介入を米国が正当化しようとする取り組みは、一九五〇年六月に朝鮮半島で全面戦争が勃発してから早々に始まった。戦争自体、そして休戦後の歴史の大部分を通じて、米国はこの戦争の起源に関する歴史を三つの柱で作りに上げてきた。それは、突然で正当な理由のない開戦、北朝鮮の体制による主導、世界的な共産主義革命の一端としてのソ連による指示というものである。ベトナムがそうであったように、米国政府関係者たちは、朝鮮戦争における共産主義者の攻撃に対する封じ込めの失敗は、介入を原因とする損害よりもはるかに悪い事象であり、朝鮮の共産主義者という牌が一つの資本主義国家というピースを全て倒れるまで次々と倒すことになることと主張した（ドミノ理論）。朝鮮戦争は地獄だったと明らかにしたが、不作為によって生じる結果はさらに悲惨であった。朝鮮半島が米国の利益外にあると一九五〇年一月に講演したアチソン（Dean Acheson）は、なぜ韓国が米国の介入を求めたのかを一九七一年に回想した。

明らかにこの攻撃は、ソ連への開戦の口実（*casus belli*）ではなかった。同様に、紛れもなく、米国の占領下にある日本の安全保障にとって大きな重要性を持つ地域、韓国の守護者という国際的に確立している我々の立場に対する公であるさまざまな挑戦であった。これに対応可能な我々の能力から考えて、この挑戦から後退りすることは、米国の力や威信を大

大きく傷つけることであった。(中略) そのため、国連安全保障理事会における言葉やジェスチャーと同様に抵抗せず、我々の防衛地帯を激しく追い立てるソビエトの傀儡によってこの重要な地域が征服されることを、我々は受け入れることが出来なかった。それは、我々が心を鬼にして武力行使をすると決意しなければならぬかのようであった。⁽²⁴⁾

戦争の勃発直後から、朝鮮において米国の軍事行動を展開させたアチソンと他の米国政府関係者たちは、米国国務長官が朝鮮半島は米国の利益の範囲外であると言及してから半年も経たない内に、米国の人々にとって外国における戦争への介入を正当化するという課題に直面した。そして、この当時、一九四一年の日本人に対する直接的関心というような外国からの奇襲攻撃という利点はなかった。トルーマン政権は、米国の人々や国連安全保障理事会に対してこの出来事を説明する際、前述した正しい戦争という考えに直接言及しなかったが、この課題で用いられた主張はこの考えを採用していた。そのため、正しい戦争という考えは、朝鮮半島における戦闘に米軍が関与するという決定の正当性を評価する際に、歴史に基づいた枠組みを提供している。ここで、どのように戦争を戦ったのかというユス・イン・ベロ (*jus in bello*) の問題について簡単に触れる前に、なぜ戦争を行ったのかというユス・アド・ベルム (*jus ad bellum*) に⁽²⁵⁾ ついて、まず考察する。

1 合法的な権威の下、行われなければならない

昔の国王たちは、戦場において兵士を率いるため、「合法的な権威」を正当化する神聖な権利を主張した。まずアフガニスタンへ、続いてイラクへ無謀にも侵攻した時のブッシュ (George W. Bush) のように、神聖な啓示を主張し続ける者がいるが、原則として、民主的に選ばれた政府は選挙民に正当性を求めなければならない。しかしながら、内戦は、(一時的に分断されている) 一つの国家において権力を争う二つの政府が、厳密にはそこに存在する

という複雑さを生じさせる。朝鮮の場合、その半島では、新羅が百済と高句麗という二つの争う王朝を征服した後、六六八年から統一された領土が誕生し、鴨緑江に北の国境が設けられた。この領土における国境は、一九一〇年に日本によって政治的な主権が奪われた後も、完全に残った。半島の分断という決定は、朝鮮の人々による同意がないまま、一九四五年八月に米国とソ連によってもたらされたものである。南北朝鮮の両者は、三八度線を合法だと見なしておらず、一九五〇年六月における通常戦争の勃発に至るまでの数年間にわたり、幾度となくこの「境界」を変えようとしてきた。⁽²⁶⁾一九四八年の建国後でさえ、両国は各々の憲法で規定しているように、相手側の領土を自国の所有物だと認識していた。⁽²⁷⁾南北の両体制は、他国による非合法的な「傀儡政権」であるとお互いが見なしており、対立する相手国の主権に異議を唱えている。このことは、彼らの意識において、国家統一という目的のために相手国を攻撃するという権利を正当化している。しかし、それ以上に両者は、攻撃を成功させるためには、それぞれの支援国である超大国からの承認や軍事的経済的な支援が必要であるという点も認識している。この支援について、南側は米国に依存し、北側はソ連を頼っている。⁽²⁸⁾両者が当時と同じような支援を得られるであろうかと疑問を持つ者がいるだろう。内戦というものは、外国による経済的、軍事的、その他の支援無しに戦えるものだろうか。

米国とそれに続く中国による朝鮮戦争への介入は、ソ連が金日成に攻撃を指示し、彼の戦争計画を画策したという意見によって米国はそれを正当化するが、このことが事実と我々が知っているため、さらに問題である。仮に米国による主張が事実であったとしても、米国の介入は、外国から侵略されている国への援助ということで正当化することが出来る。我々は、米国政府が彼ら自身のレトリックをどの程度正確に信じていたかについて、確かめる方法を持っていない。同様に、元々の分裂していた地点まで北朝鮮を押し戻そうという韓国の行動を支援したことに對して米国は正当化出来るかも知れないが、三八度線を越え、北朝鮮の領域へ進むことは、米国が侵略

軍であるということを示し、北朝鮮を支援する中国に正当な理由を与えることになってしま⁽²⁹⁾う。

2 正しい理由と意図のために、行われなければならない

正しい戦争という考えでは、国家に強硬な行動を取ることを許容する事情を明らかに認めている。多くの平和主義者でさえ、独裁者を倒すため、あるいは自衛の目的による攻撃された際の強い報復の正当性を認めている。多くの人々は、米国が第二次世界大戦に参戦したことについて、正しかったと信じている。ジェノサイドに対する戦いなどの人道的な理由も、一般的に容認可能だと考えられている。南北の両国は、各々の公式の物語において、自分たちが相手国からの攻撃に直面した上での自衛の行動だったと参戦を正当化する主張をしている。また、両国は支援無しで戦えた戦争ではなかったと信じている。李承晩と金日成は、戦争の承認と軍事的な支援について、各々の以前の占領者たちへ無理に求めた。参戦についての米国の弁明は、北朝鮮が戦争を始めたという韓国による主張の繰り返しであり、加えて共產主義の脅威を封じ込める（あるいは巻き返す）ためにも必要であったというものである。

朝鮮戦争の起源に関する論争は、戦いに関与する正しい原因や目的を持った好戦的な当事者がいたかどうかという我々が目指す結論を複雑にする。全ての当事者によって編集された戦争の物語は、一九五〇年六月末に戦争は突如始まったという見解を強調している。それに続く当事者たちの反応は、必要なことの一つ、すなわち自衛の一部であった。これらの物語は、切れ目のない戦闘が一九五三年七月二七日に休戦協定が結ばれて終わった、もしくは延長されたと平凡に状況を説明している。しかしながら、一般的にそれらは、この時期より以前に、まず米国占領下の南側で起こり、続いて一九四九年から三八度線で起こった騒動を無視しているか、軽視している。このような近視眼的な見方は、国家に意図を持たせたり、準備をさせたりする言葉や行動、先に好戦的な行動を始めたという

状況さえ加味せず、最初の銃声が鳴った後についてのみ捉えて、開戦した状況を考えるものである。その上、朝鮮戦争においてさえこの「事実」、すなわち最初の銃声を確かめることは困難である。戦争論の学者であるキャディ (Duane L. Cady) は、手段と目的の調和としてこの点を説明するだろう。

次の戦争は最初の銃声ではなく、脅威や恐怖、それらへの対抗という自分たちの全滅を避けようとする取り組みの中、相手国を壊滅させるぞと脅す国家の政治によって始まる。しかしながら、手段と目的を分けようと努力しても、我々の得る結果は自分たちが生きる政治の延長であり、我々が選んだ手段はある種の我々の求める目的を反映する。手段と目的は、一つの、そして同様の事象という側面を持っている。⁽³⁰⁾

平壤 (ひいてはモスクワ) によって促され、調整されたと考えられている南側における反乱的行為という韓国と米国の主張の妥当性について判断することは不可能に近く、それが典型的な内戦である一九五〇年六月以前の戦闘に対する我々の評価を複雑にしている。⁽³¹⁾ 何カ月にもわたり、何百人もの死傷者を出した三八度線における戦闘は、朝鮮戦争の起源に関する更なる問題を提示する。第一に、なぜこれらの騒動は、全面戦争に至る前に止まったのか？ 第二に、なぜそれらは朝鮮戦争の物語の一部あるいは別物と見なされるべきなのか？ 加えて、戦争に突入する行動、特に攻撃するという北朝鮮の決断、そして一九五〇年より前に行われたスターリン、毛沢東、金日成による往復書簡や会談の内容を理解するためには、韓国と米国の対北朝鮮戦略にどの程度影響があったのかについて研究する必要がある。現在、結論は出ていないが、これらの疑問に対する答えは、南北の両国が自身の戦争参加を正当化する目的で、いかに「自衛」を用いてきたのかを複雑にするだろう。⁽³²⁾ それらは、さらに、戦場で向かい合う前に交戦国

が平和的な手段を使い果たしたかという正しい戦争の教義に関する疑問を提示する。一九五〇年六月までに、戦争を防ぐためにどのような手段が用いられたのだろうか。そして、戦争は交戦国に唯一残された選択だったのだろうか。

3 全ての平和的手段を使い果たした後の最終手段として行わなければならない

平和が破られた後、多くの戦争（あるいは戦争がなかった場合）において、戦争を防止するために全ての平和的な手段が使い果たされたかどうかを確かめることは困難、もしくは不可能である。敵国との折り合いをつけようと努めたが、残念ながら失敗してしまったと国家が主張することが、せいぜい出来る程度である。朝鮮戦争の場合、両政府は直前まで和平案を提言していた。しかし、双方の試みは、お互いがプロパガンダであると見なした。どちらも、その時、相手が本当に平和を望んでいると信じていなかった。それは、南による資本主義体制あるいは北による共産主義体制の下での統一という彼らの条件による平和的な解決が、相手国の利益にならないと双方が（正確に）信じていたことが主な理由である。また、南北の両者は、彼ら自身の超大国というパートナーと共同で平和を保とうとする目的を共有していた。米国とソ連が半島を分断し、自分たちに依存する国に対して影響力を拡大し続けたように、それら二つの超大国は平和の維持にも責任を負っていた。北と南を再統一するといういくつかの熱心な試みは、モスクワとワシントンの間における議論が決裂した一九四七年までに消え去った。この時期から米ソの活動は、地理的にもイデオロギー的にも二つに分断した朝鮮の国を形成するというものに移っていった。これらに關しては、まず南側が、続いて北側が選挙を実施し、それぞれ大韓民国（南朝鮮）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を建国した一九四八年に、成功したことが証明された。

解放直後、米国（と恐らくソ連）は、分断が戦争につながることを認識していた。一九四五年九月、ホッジ

(John R. Hodge) 中将は、報告書において朝鮮が「爆発する準備をしている火薬の詰まっている樽⁽³³⁾」という印象を述べている。また、日本や朝鮮の人々が予想した第三次世界大戦が迫っているという噂も、広がっていた。そのため、平和の行方は朝鮮半島の再統一次第であった。しかし、二つの要因がこの行方を複雑にした。第一に、南側における不安を助長させるという北側からの指示に対する米国の軍事占領者たちの意見は、朝鮮の政治的派閥の異質性を均衡させるという真剣な取り組みを妨害し、より保守的な派閥を支援することでそれを強めるというものであった。一九四八年の選挙は、ある人々が自分たちに対する米国の差別的な政策に気付いた結果、韓国の左派政党、そして選挙をボイコットすることを選択した左派政党の支持者を除くかたちで行われた。⁽³⁴⁾ 第二の問題は、米国とソ連の関係が悪化した後に表面化した。一九四五年一月、二つの超大国は、モスクワ外相会議 (Moscow Conference of Foreign Ministers) において、朝鮮半島を五年間の信託統治により管理することで合意した。⁽³⁵⁾ しかし、米国はその直後、国連が調整した選挙という新しい計画に賛成し、信託統治案に対する支援から手を引いてしまった。この新しい目的のため、米国は朝鮮半島全域の選挙を促進するための国連臨時朝鮮委員会 (United Nations Temporary Commission on Korea: UNTCOK) を組織した。二つの占領国の関係と同様に、この政策転換は、南側における派閥につけ込まれたことにより、さらにもう一度、分裂を招いた。ソ連の左派グループにおける方針は信託統治の支持である一方、UNTCOKの右派グループは南側におけるソビエトの指導に応じることを拒否した。これらの問題は、戦争を勃発させる火薬樽に火をつける結果にならなかったが、導火線にマッチを近づけた。南北の両者間に存在したあらゆる信頼は、たちまち消えてなくなった。新しく就任した二人の指導者は、分断された朝鮮半島を再統一する唯一の方法が戦争だと、すぐに理解した。⁽³⁶⁾ この分断を終わらせるための平和的手段について探し求めるかわりに、当事者たちは問題を悪化させる段階に進み、その結果、南北朝鮮は戦争に近付いた。⁽³⁷⁾ 双方とも、平和的共存という選択肢で妥協しようとは望まなかった。彼らの占領国は、自分たちが画策した分断について、平和的な解決

を追求しようとはほとんどしなかった。

四 *Jus in Bello* (いかに戦われるのか) の不正

ほとんどあり得ないが、たとえ勝利によって得る報酬と戦争にともなう人的物的損害を比較することが可能であったとしても、現代の戦争は、それらの組み合わせを正当化する方法によって行われてきた。勝利と言うよりは手詰まりという形で終えた朝鮮戦争も、例外ではない。朝鮮戦争の激しさは、実際、空間的・時間的な緊密度を考慮した場合、第二次世界大戦やベトナム戦争よりも大きいものであった。戦争の結果、朝鮮の人々は苦しみ続けている。半島は分断された状態で残り、家族の別離は続き、そして両国間における散発的な戦闘は、我々に半島には表面上の平和しかないとを思い出させる。

朝鮮戦争は、確かに戦争が地獄であるとするウォルツァーの考えの域に達していた。何百万もの人が死に、民間人の死者は軍人の死者を上回った。朝鮮の人々は、戦況が変化するたびに何度も領土の持ち主が変わった結果、敵が殺戮され、ジェノサイドが悪化したことを疑問に思った。⁽³⁸⁾ 韓国へ入るため漢江を渡ろうとした民間人に対する米国の機銃掃射により、非戦闘員の被害者は増えた。⁽³⁹⁾ 北朝鮮への激しい爆撃は、都市を一掃した。あるレポートは、「北朝鮮において動く全てのものは、軍事的な標的だった」と述べている。⁽⁴⁰⁾ 米国は、北側における全ての主要都市を爆撃した。リッジウェイは、「焼夷弾で都市を焦土化する」目的で、平壤を攻撃した。⁽⁴¹⁾ 一九五一年八月に *U.S. World and News Report* は、戦争が「人や兵器、物品、方法を継続的に試す目的のために、一進一退で戦われた実験的な戦争」ではなかったかという疑問を呈した。この疑問の背景には、なぜ米国は蓄えていた原爆を使用し、戦争を終わらせなかったのかということに対する追及がある。⁽⁴²⁾

戦争の起源とその結果は、世界の多くの人々にとっては二〇年前に終わっている冷戦の最後の前哨地の一つに対

する政策を、今日でも悩ませ続けている。米国は、伝えられるところでは、ならずもので予測不可能な北朝鮮体制による次の奇襲攻撃を抑止するため、東アジアにおけるプレゼンスを維持し、世界で最も経済的に成功した二カ国をこの地域における米軍によって防衛している。朝鮮戦争における大量爆撃の結果から学んだ教訓の上に建てられた北朝鮮について、ラスウェル (Harold Lasswell) の「暴力の専門家が最も強力なグループになっている社会」である国家という定義をカミングス (Bruce Cummings) は引用し、彼は「兵営国家」だと主張している。⁽⁴³⁾ 北朝鮮は、歴史を繰り返さないために、最も重要な施設を地下に設け、核兵器で武装し、それを米国の侵略に対する抑止力のために必要なことだと主張している。一九四〇年代後半と同様に、朝鮮半島において潜在的に戦争に直面したが、平和的な半島の統一の道を開くために、朝鮮戦争の公式な終了について交渉すること、危険な核兵器開発プログラムに変わる選択肢を北朝鮮と真剣に交渉すること、そして経済的な困窮を是正することにより、この批判されてきた状況を正そうとする小さくも真剣な努力がなされてきた。これらの失敗は、双方を戦争に近付ける全ての当事者による、軍事的な手段を含む朝鮮半島における将来の行動を正当化する様々な試みを不適切と見なす。

- (1) Michael Walzer, *Just and Unjust War: A Moral Argument with Historical Illustrations* (New York: Basic Books, 1977), 33. (萩原能久監訳『正しき戦争で不正な戦争』風行社、二〇〇八年)
- (2) Andrew Fiala, *The Just War Myth: The Moral Illusions of War* (Ilanham, MD: Rowan & Littlefield, 2008), 3.
- (3) 一九九五年、ワシントンD.C.のスミソニアン博物館は、広島への原爆投下五〇年を記念したイベントにおいて、原爆投下による被害状況も含めエノラ・ゲイ爆撃機の展示を試みた。しかし、この計画は、退役軍人や議会のグループによる反対運動が成功し、被害状況の展示は撤去された。このイベントに関する文献としては、以下がある。Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt, eds., *History Wars: The Enola Gay and Other Battles for the American Past* (New York: Metropolitan Books, 1996).
- (4) Walzer, *Just and Unjust War*, 21.
- (5) Peter S. Temes, *The Just War: An American Reflection on the Morality of War in Our Time* (Chicago, Ivan R. Dec, 2003), 4.

- (6) これらの原則にこらへては、以下の文献のものを改良した。Diana Francis, *Reflection on the Morality of War in Our Times* (Chicago, Ill: Ivan R. Dee, 2003), 9-10; Fiala, *The Just War Myth*, 12-14.
- (7) 例えど、Fiala, *The Just War Myth*, 5.
- (8) "Charter of the United Nations," 興味深いことに、国連憲章には民間人の取扱いに関する記述がない。
- (9) キャナヒは、平和主義の解釈に関する興味深い考察を試みてゐる。Duane L. Cady, *From Warism to Pacifism: A Moral Continuum* (Philadelphia, Penn: Temple University Press, 1989), Chapter 1.
- (10) "Cat in the Kremlin," *Time* (July 17, 1950), 24.
- (11) "The People: The Time in Korea," *Time* (July 10, 1950), 9.
- (12) *Time* (July 10, 1950), 13.
- (13) I. F. Stone, *The Hidden History of the Korean War* (New York: Monthly Review Press, 1952). (内山敏訳『秘史朝鮮戦争』新評論社、一九五二年)
- (14) メイは、「三二本の映画は、過去数年間におけるトップ五〇の映画について分析しなかった。それ以上に、俳優や監督は朝鮮戦争や反共主義をテーマとした映画で一度もアカデミー賞を受賞していなかった。事実、この分野における多くの映画は破産することになった」と述べている。Lary May, "Reluctant Crusaders: Korean War Films and the Lost Audience," in *Remembering the "Forgotten War": The Korean War Through Literature and Art*, edited by Philip West and Sub J-i-moon (New York: M. E. Sharpe, 2001), 127.
- (15) May, "Reluctant Crusaders," 115-26.
- (16) 「ブライネット・ライマン」「ボールハーバー」「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」のような超大作映画がヒットしたように、ハリウッドは近年第二次世界大戦をテーマに回帰している一方、朝鮮戦争についてはさうではない。
- (17) May, "Reluctant Crusaders," 133.
- (18) David Haberstam, *The Flytes* (New York: Villard Books, 1993), 73. [翻訳に当たり、金子宣子訳『ザ・フィフティースー』一九五〇年代アメリカの光と影』新潮社、一九九七年、八九頁を参考にした——訳者]
- (19) 週刊雑誌『U.S. News and World Report』(October 5, 1951) は、「朝鮮・忘れられた戦争」(二二頁)と述べ、この点をさらに発展させよう。
- (20) Winthrop D. Jordan, Miriam Greenblatt, John S. Boves, *The Americans: A History* (Evanston, Ill: McDougal, Littell & Company, 1994), 780-84. 米国は韓国を武装させたが、それは「攻撃的」武器ではなく「防衛的」武器に与つておいた。
- (21) 多くの先行研究があり、筆者も以前、本記におらへて、このような朝鮮戦争を巡る議論にこらへて言及したことがあつた。Mark E. Caprio, "Neglected Questions on the 'Forgotten War': South Korea and the United States on the Eve of the Korean War," *The Asia Pacific Journal* 9-5-3

- (http://www.japanfocus.org) (e-journal, January 31, 2011).
- (22) "U.S. Throws Forces Into Korean War." *Newsweek* (July 3, 1950).
- (23) John Lewis Gaddis, *We Now Know: Rethinking Cold War History* (Oxford: Oxford University Press, 1997), 72. キャタリスを含め多くの人は、北朝鮮が南側を攻撃することをスターリンがより明確に考えつく原因となった米国のアジアにおける利益の一部から朝鮮半島を除外するというアチソン國務長官による一九五〇年一月二日の演説に注目している。電報は、六月一七日にモスクワで金日成と会うという決定内容を、ソビエトの指導者が平壤にいる外交官のシトゥイコフ (T. F. Shitykov) へ伝えたことを示している。シトゥイコフは、金へ知らせることを一月三〇日まで待った。
- (24) Dean Acheson, *The Korean War* (New York: W.W. Norton & Company, 1971), 20. 週刊雑誌はその見解を強めている。以下の文献では、スターリンが最初に掲載されたことへの論争は不要だと考えられる。戦争における戦術について述べてきた人々は、民間人と軍人の区別の無意味さと均衡に関するいくつかの考察を示すことにより、戦争が恐ろしいものだと説明している。以下を参照せよ。Bruce Cumings, *American Airpower and Nuclear Strategy since 1945*, in *War & State Terrorism: The United States, Japan & the Asian Pacific in the Long Twentieth Century*, edited by Mark Seden and Alvin Y. So (Lanham, MD: Rowman and Littlefield, 2004); Dong-Choon Kim, *The Unending Korean War: A Social History* (Larkspur, CA: Tamal Vista Publications, 2000).
- (26) この歴史のごころは、以下の文献に詳しく記録されている。Bruce Cumings (*The Origins of the Korean War*, 2 vols. (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1981, 1990), 又朴明林 (한민전쟁의 발단과 기원), (원: 차갑, 2003))。
- (27) 北朝鮮は、ソウルが公式の首都であることを一九七二年までに認めた。韓国は、非武装地帯 (DMZ) ではなく鴨緑江が北の国境だとする主張を続けている。
- (28) いくつかの理由として、スタック (William Stueck) に代表される学者は、朝鮮戦争の国際的な歴史を重要視する。外国からの参戦がなければ両国とも戦争を遂行出来なかったことから、彼は「第三次世界大戦の代理戦争」だったと受け止めるよう主張している。そのため、それを内戦に分類するものは不正確だとする。William Stueck, *The Korean War: An International History* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1995), 3.
- (29) それ以上に、中国の行動を正当化している点は、開戦直後より米国が中国領内へ爆撃をしていたという事実であり、鴨緑江と中国領へ戦闘が拡大するという脅威であった。その上、中国軍は米韓の合同軍が中朝国境手前まで迫るまで行動を差し控えていた。ウォルツァーは、以下の文献において、ケース・スタディとしてベトナムへの米国の関与について考察するとともに、軍事介入の正当性に関する議論を提供している。Walzer, *Just and Unjust Wars*, 96-101.
- (30) Cady, *From Warism to Pacifism*, 48.

- (31) カミングスは、ソ連が全面戦争の開始前にゲリラ戦を必要としていた点に関して、小さな証拠しかないと主張している。Cummings, *The Origins of the Korean War*, vol.1, 283.
- (32) 筆者は以前、この問題に焦点を当てた。Caprio, "Neglected Questions".
- (33) John R. Hodge to Commander-in-Chief, United States Armed Forces, Pacific, "Conditions in Korea" (September 13, 1945), in *John R. Hodge 日記, 1946.6 - 1948.8*, vol. 3, Seoul: Institute of Asian Cultural Studies, Hallym University, 1995), 7.
- (34) 金雲泰は、一九四六年の政党登録法制定について、左派の政治参加を妨害するための措置だったと説明している。金雲泰 美国政の韓国統治 (弘博英社、一九九二)、151-52.
- (35) 米英ソの外務大臣が参加したモスクワ外相会議は、第二次世界大戦に関する未解決の問題を処理することを目指しており、その中には朝鮮の統一も含まれていた。米ソは、この会議の後、朝鮮に関する一連の追加会議を開催したが、意見の相違を一致させることに失敗した。
- (36) しばしば指摘されることであるが、金日成と李承晩の両者が相手国を攻撃する野心を持っていたことを明示する強力な証拠は存在する。筆者は、以下の文献において、これらの野心について言及したことがある。Caprio, "Unanswered Questions."
- (37) 朝鮮半島における戦争勃発の高い可能性について米政府関係者がほめかした点に関しては、紙幅が限られるため詳細に論じる余裕はない。筆者は、以下の文献において、この点に関する概略的考察を試みたことがある。Caprio, "Unanswered Questions."
- (38) 以下を参照せよ。Kim, *The Unending Korean War*.
- (39) Charles J. Hanley, Sang-Hun Choe, and Martha Mendoza, *The Bridge at No Gun Ri* (New York: Henry Holt and Company, 2001).
- (40) これは、ハンガリー人のレポート *ティボア・メリヤ* (Tibor Mery) に由来するものであり、以下から引用した。Cummings, "American Airpower and Nuclear Strategy since 1945," 76.
- (41) Cummings, "American Airpower," 75.
- (42) "Korea: the Forgotten War," *U.S. News and World Report* (October 5, 1951), 21. この戦争はナバーム弾の存在を世界中に知らしめた。
- (43) Bruce Cummings, *North Korea, Another Country* (New York: The New Press, 2004), 1.